公開質問状（７月６日付）に対する岩国市からの回答

質疑応答（概要）

井原

　少し確認する。ブログは、あることないことを面白おかしく書いたものではない。本人が苦悩して、やりたくないことをやらされたことが書いてある。その後の議会審議や岩国市や商工会議所とのやりとりを総合すると、ブログに書いてあることはほとんど真実。サクラの質問が用意されて、それに市役所が絡んでいたのではないかということが問題。そのあたりの事実確認をしたい。

　事前打合せをしたかどうかという言葉の問題ではなく、実際にそこで何が行われたのか、住民説明会が公平に運営されたのかどうかが問題となる。

　商工会議所によると、専務が受付で質問者５〜６人とたまたま会ったので、控室まで連れて行き、質問者が中に入って市役所の人に会ったと言っている。いきなり、市役所の人に会いに行くということも考えられないので、事前に何らかの約束なりアポイントがあったのではないか。

高田

　事前にアポがあったわけではない。

井原

　質問者の意図は推測できる。わざわざ部屋に連れて行って話を聞くというのは、「李下に冠を正さず」ではないが、疑惑を招きかねないので、軽々に部屋に入れるべきではないと思うが、そうしたということは、何か事前の約束か意図があったのでは。やはり不自然さが残る。

高田

　ある団体の方から、「質問したい」とう話があったので、だから当てるということではなく、それでは挨拶をということで、司会者の所に連れて行った。

井原

　商工会議所の人は、司会者に会いたいと言ったのか。

高田

　そういうことではなかった

井原

　それでは、高田さんが気を利かして、司会者の所に連れて行ったのか。

高田

　気を利かしてと言うか、それではということで、そんな深いことを考えて行動しているわけではないので。

井原

　やはり、不自然ですね。

　そこで対応したのは、高田さんと加納さんですね。

　主に対応したのは、加納さんですね。

加納

　来られて、「よろしくお願いします」ということで挨拶を受けた。座って話をしたことはない。

井原

　その時、専務以外に他の人はいたのですか。

加納

　専務が連れて来られて他の人はいなかった。専務は中に入らなかった。

　５〜６人の方の挨拶を受けた。

井原

　その人達は知らない人なのでしょう。そういう人たちが何と言ったのですか。

加納

　「質問したい」という趣旨のことは専務が先に言ったので、彼らは「よろしくお願いします」というような簡単な挨拶だけだった。

井原

　反対の人も賛成の人も「当てて欲しい」と、ロビーなどで言う人はいるから、・・・

副市長

　自分も言われたではないですか。以前、市民会館で愛宕山の用途などの説明会があった時、長々と発言されたでしょう。あの時、南部さんが私を呼んで、前市長の井原さんに当てて欲しいと頼まれた。

井原

　確かに発言したが、そんなことは知らないよ。

（丁度その時、南部さんが遅れて出席）

南部

　そんなこと言ったことは絶対ないよ。いつの話。

副市長

　２３年ころかな。かなり前の愛宕山の用途の説明のときです。

南部

　そういう昔の話を持ち出さないでもいいのでは。

副市長

　言われたから司会も当てたわけではないが、そういうことは、あるという話。

井原

　質問したい人は、賛成であれ反対であれ、廊下でもロビーでも司会者や市役所の人を見ればあててほしいと言うことはあると思う。だから、この人たちもわざわざ部屋までいったら、はいお願いしますと何もしないで帰ってくるということは考えられない。当然当ててほしいと思って行っているわけだから、名前を言って自己紹介をするだろうし、ブログにあるように質問内容などもせっかくのいい機会だから加納さんに言うかもしれない。知らない人だから、この機会にせめて名前と顔を覚えてもらおうと思うはず。だから、なにも言わないでただ挨拶だけで帰ったというのはすごく不自然。自己紹介くらいはしたのではないかと思うのですが、どうですか加納さん。

加納

　いえ、特にお互いの自己紹介はなかった。

井原

　加納さんが司会者がという事は、言ったのでしょう

加納

　私が司会者だということはいい、もし質問を希望されるのであれば、（手をあげてください？）とは言ったが、それ以上のことは言っていない。

井原

　事前打ち合わせをしたかどうかは別にして、会って話をすれば、あててほしいと思うのは誰しもだから、加納さんに名前と顔を覚えてほしいと思うのは自然な流れだと思う。彼らかまたは専務が、紹介する…

加納

　こられたときに、質問したいという発言があったから、それはそういう趣旨だと思った。

名前は言わなかった。初めての方なので、名前を聞いても覚えられないし、名前で指名するわけではないので。顔も一瞬のうちに覚えられるわけでもないし、あの広い会場で上から見たらよくわからない状況だったので・・・

井原

　最後の質問になるが、実際の質問者は、ブログの内容とほとんど一緒。川下の連合会長だけが５〜６人の中に入っていないと思われる。後は、ブログにある子育てと地域振興とスポーツ振興などについて4人の方が質問していると思われる。だから、加納さんは、よく顔を覚えてあてたなという感じがする。

　司会者としては、賛成と反対がいるのだから、できるだけいろいろな人に当てようとする。だから少し顔を覚えていれば、その人たちに当ててしまうのではないか。実際に指名した人の中にその5〜６人が入っていたのか、覚えているのではないですか。

加納

　初めての人なのでわずかの間に顔を覚えられるわけはないし、内容についても、他の会場でも子育てやスポーツ振興など、どの会場でも似通った質問はあったので、

井原

　他の会場でも、サクラはいたかもしれませんのでね

　それは別として、実際に顔を見ているのだから、少し記憶は残っていたのではないですか

加納

　それはわからないです。どこにいるかもわからないし

井原

　ブログによると、前のほうにバラバラに座っていたようですが

重岡

　指名の際に青い服とか緑の服とかいって元に戻すようなことをして、意図的な流れをあなたが作った。あの時会場がざわめいたのも事実。あて間違いをしたから戻して発言させようと、みえみえだったわけ。

加納

　一般質問でも答弁したが、実際の色としてそういうように見えた。青か緑かわからないが、見えてその方に当てようとしたのだが、その方が手を降ろされたので、もう１回手をあげて下さいと言った。

重岡

　だけど、その人が手を挙げるまで、その人に誘導した。結果的にブログを書いた人は自分だと気がついて立ったわけ。何回も元へ戻そうとする声がなければ、彼もそういう判断はしなかったはず。そうでなければ発言をしないで済んでホッとした、「見え見えじゃん」と書いてある。頼まれたからどうしてもその人に当てなければならない、そういう流れが見て取れる。どうしても元に戻そうとするから、不自然な動きがあって、そうした中で会場がざわついた。そこは、ごまかそうとしてもごまかせない一つの流れがある、それは、依頼を受けたということ。

津田

　商工会議所の専務が、受付でたまたま５人の方に会って、控室まで案内した。質問者が５人、当日同時に受付に現れることが非常に不思議。彼らは、お互いに示し合わせて来たことになる。加納さんは顔を覚えていないと言うが、質問された方はまさにその５人の中に含まれていた、これもまた偶然という。そんなことがあり得るのか、どうしても、商工会議所も含めてどこかに意図があると考えられる。顔は覚えていないが、偶然にその人達を指名したという。聞いている限り、合理的な説明はされていない。

副市長

　新聞にもあったが、本人は面白おかしく、あることないことを書いたと言っている。最近の話だが、ブログが消された後に、井原さんが打ち出してみんなに配っているのが、本人の友達とか同級生の耳に入ったのでしょう、彼らが、井原さんがブログを配っているが知っているのかと本人に聞きに言ったらしい。その時も、ブログのグループがあって、そこで面白おかしく前からやっていた、それと同じつもりでやっているのであって、特に意図的にやったものではないといっていたとのこと。同級生たちが、本人に、井原さんが配っていることについて、井原さんから聞いているのか、了解したのかと聞いたとのこと。それは、本人に言っているのですか。

井原

　言っていません。

副市長

　今、この人はすごく傷ついているらしい。この人はかわいそうだと思う。「同じ今津にいながら、どうしてこんなことをするのだろう」と怒っていたらしい。こういうタイトルを付けているというのは、面白半分に初めているのですよ、これは。消しているのに、これがまたみんなの目につくということにショックを受けて、憔悴しているらしい。政治団体の代表者が、自己責任でやるのならいいですよ、まったく関係のない市民のブログを引っ張り出して、それも消したものを引っ張り出してこういう活動をされるということは、何も思っていないのですか。

井原

　思っているよ。本人は気の毒だと思う。でも、もっと気の毒だと思うのは、彼がむりやりこういう質問をさせられるという圧力を受けたこと。書かれていることは、事実だと思う。面白おかしくこんなことを書けるわけがない。副市長、これが面白おかしく書いたものだと思いますか。

副市長

　我々にはわかりません。本人がそう言っている。

南部

　その資料には、いつ書かれたのか時間が書いてある。朝の５時、住民説明会が終わった翌朝の５時に投稿している。これは、動かない事実。その後、いろいろ圧力があって削除したけど、実際には、本人が５時に、圧力もないときに書いているわけだから。間違いなく本人がそういうつもりで書いたことになる。

副市長

　５時４７分GMTと書いてある。GMTは、グリニッジ、世界標準時間ですよ。ここに書いてある時間は、日本の時間より７時間か９時間ずれているはず、朝の５時に書いたわけではない。前の日から一晩中かかって書いたと言われるから言うのですが。

南部

　正確な時間は、本人しかわからないかもしれない。これは、日本のブログだから、

副市長

　GMTの意味を調べたら、日本時間の９時間前だということ。丁度、真っ昼間になる。

　夜中中考えて朝書いたと言われるから、私は、反論している。

井原

　だから、どうなんですか。大した話ではない。

津田

　問題は、そうしたことではない。意図的に市も絡んで・・・

井原

　これは、私の責任で出している。私は、彼も気の毒だと思うし、いろいろ困っているだろうし、会議所などとの関係で困っているだろうこともわかるし、公開することについては悩んだし、検討した。でも、もっと大事な事実を明らかにしなければならないということもあるから、そちらのほうが大事だし、もう一つ言えば、すべて公開されているものだから、圧力で削除したかもしれないが、一旦公開されたということは世界中に公開されているわけだから、その記録は今でもインターネットに残っている。私が無理やり作り出したものでも何でもない。世の中に公開されているものを使って事実を明らかにする必要がある。不公平な行政が行われていれば大問題だから。そちらの公益を実現するために、私の責任で公開したもの。そのことの責任は、私が負うもの。副市長がそれを心配していただく必要はない。

副市長

　人として、いかがなものか。

井原

　私の責任でやっていることで、それで非難されることは、私の問題だから、ここで副市長から言われる必要はない。

小中

　何が問題になっているかというと、住民説明会をやるときに、控室に誘導して話をしたという事実関係についてだ。ブログに出したということは、仲間内だけでなく広くみられるということは当たり前のことで、あなたが心配することでも、本人が悩む話ではない。本来は、行政が関与したかどうかが問題。そういう事実関係を今言っている。

副市長

　重岡さんが、一般質問でも、「サクラ質問者」ということを何回も言われたが、私は、サクラの質問者はいないと思っている。「サクラ」というのは、江戸時代に、芝居を見るのに一般の人はお金を払うが・・・

津田

　あのね、言葉の本質ではない、現代では別の意味で使われているのだから。

副市長

　芝居の興行主が、他のお客はお金を払って入るが、ただで入れて芝居を盛り上げる、それがサクラの役割。なぜサクラと言うかは、花見でサクラはただで見るから、この芝居をただで見るということから、「サクラ」という語源になっている。

　今回で言えば、主催者である行政と市民が事前に話し合って都合のいいようにやるというのが「サクラ」になるが、一般質問でも、「サクラ」と何度も言っているが、市は何もやっていないので、「サクラ」には当たらないと言った。

重岡

　問題は、「サクラ」とか言葉ではなく、ブログが真実かと聞いた。「サクラ」は、ブログの本人が書いた言葉で、私が作った言葉ではない。先程の政治団体の責任という点については、覚悟を持っているから我々は動いている。そのことによって、岩国基地が極東最大級の基地になっていくということは、この本人もそうだが、政治にさほど関わりのない人でも十分承知しているはず。だからこそ、彼も、会場で持論を展開して容認しなさいという趣旨の発言をした。それは、彼も責任を持った発言であるはず。それを、副市長が「人格を損ねる行動していいのか」というのは、議論としては間違っている。

　問題の本質は、艦載機移駐の容認にあたっての市長の考え方の根本が間違っていること、４３項目や４条件など。すべて条件が整っていないのに、歪曲、矮小化しながら進めていった、サクラ問題を発展させた基本はそこにある。あなたが政治団体に苦言を呈するのであれば、それをそのまま市長に返したい。あなた方がすべて矮小化し容認してしまったそこに問題があるということを自覚して貰わなければならない。

副市長

　それは、今議論していることではない。

　市が質問者を用意したとかそういうことはないので、サクラではないということを言っている。

津田

　あくまで、挨拶に来た人を偶然に当てたということですね。

加納

　挨拶に来た人を当てたという認識はない。誰が来たかも覚えていないので。

津田

　だから、合理的な説明になっていない。それを、副市長は、何もしていないという発言をするから、私は強く反論している。

副市長

　市は、何もしていないですよ。

津田

　何も合理的な説明になっていないから、挨拶に来た人を偶然に指名したのですねと確認している。

副市長

　当てた当てなかったというより、サクラ質問者というのは、市が事前に頼んでということだが、それはやっていない。

井原

　そんなことは言っていない。

重岡

　廊下や受付で頼まれたりする、それはいいが、用件があるということでわざわざ控室まで連れ込んだ、ここが、コンプライアンス上問題。確実に欠けている、アウトだ。すきがあった。ということは、市長が容認せんがために、その道筋を止めようがない、それが頭にあったから、やむを得ないと中に入れた。１分であろうと、立って話そうと関係ない。

いろいろ不祥事も起こって、コンプライアンスは今一番問題になっている。

副市長

　来ちゃった人を、多分私の想像では、帰れとは言いにくいので、部屋に入れたということではないか。

重岡

　私が担当だったら、入れない。誤解を招くので。

副市長

　事前に頼んだりということは、それはない方がいいに決っている。コンプライアンスを完全に守ろうとすれば、一切断るということもあるかもしれないが、ただ、来ちゃったのを入るなとは言えなかったのではないか。

南部

　加納さん、私がどこに座っていたか覚えている。覚えていないわけないじゃない。あなたがそこにいて、私はここにいた。最後に質問した人は３列後ろの真ん中の人。最初から最後まで何回も手をあげたので、知らない訳がない。

加納

　いろいろな方が手をあげたので、全部当てきることはできない。

南部

　説明会でいちばん大切なことは、住民の声を全部吸い上げることにあるのではないか。だったら、あのときも、３０分延長という声も出たのに、あなたはそれを打ち切った。質問したい人が何人もいたのに、全部だめになった。それに、今言った問題が絡むからおかしいのではないかということになる。あなたたちが５人当てようが、それはいい。しかし、反対派の意見も全部聞いて欲しい。

加納

　手をあげた方で当たらなかった人は、賛成派にもいたと思う。

副市長

　９時１０分過ぎたから、もういいだろうと閉めたわけだが、それまでに、賛成が５人、反対が６人、時間的にも３分の１が賛成、３分の２が反対だった。残った人全部というわけには・・・

南部

　手をあげて当たらなかった人に、質問状でもいいから、全部聞くようにして欲しい。私がどういう意見だったかわかりますか、私の意見を聞く気はないのか。

小中

　さっきからずっと聞いていると、何が問題なのか。自治会をやっているが、愛宕山やゴミ処理場などの問題でいろいろ説明会をやってきているが、ほとんどが決まったような状況の中で、申し訳程度にみなさんの意見を聞いたというだけのそういうやり方で来ている。

副市長

　今回は違う。

小中

　今回も、そういう雰囲気にある。一般的に言えば、受付に来て控室まで連れて行くということは・・・

高田

　連れて来たのは、私たちではない。

小中

　部屋に入れるというのは、非常に誤解される。ゴミ焼却場の問題でも、自治会長に説明する段階ですでに過去形の文書で来ている。何回も集会に行っているが、過去にも、こうしたサクラ的な質問が出ている。誤解を招くようなことをすべきではない。

井原

　市がサクラを用意してとかそういうことを言っているのではない。ただ、何らかの接触があって、その結果何らかの不公平な運営が行われた可能性があるのではないか。ブログを見れば明らかだし、今までのやりとりを聞けば、事実関係を整理していくとどうしても不自然な点が残る。事前打合せをしたとは言えないかもしれない、サクラを用意したとも言えないかもしれない。でも、質問者と事前に接触した事によって、何らかの不公平な運営が行われたのではないかという疑惑は、どうしても残る。

国の動きを見ていて感じる。そうしたことがあったと想像するが、その責任は、政治が取らなければいけない。真面目な職員が苦労、苦悩しているのではないかと、そういう責任は、市長や副市長がキチンと取って、文部省のように、役人たちに責任を押し付けて政治は知らないふりをするというのは良くないと思う。

もしそういうことがあったとすれば、政治としてその事実をきちんと認めて、これからはそういうことがないように厳正に運営するというようにすればいいと思う。

副市長

　今回、不公平な運営が行われたことはなかった。公平に運営されたということは言っておきたい。

重岡

　今回の住民説明会の結果で、市長は容認した。その工程の中での問題を指摘しているので、間違いなく極東最大級の基地になってしまった。であれば、今回の住民説明会の本質論、私が議員である以上、ずーっと追求していく。容認をした根底がここにあるから。これは、しっかり覚えておいて下さい。

南部

　最後に、白木さんにお願いがある。前は、白木さんといろいろな話をしたことがある。こういう対決の場でやりあっても本当は仕方がないので、我々も岩国の住民なのだから、岩国が安全で住みよいまちであるようにと願っている。これは、共通の思い。そのためのいろいろな意見だから、市長の意向も考える必要があるのはわかるが、副市長の判断で、公平、公正に市を運営するのだということをいうのだったら、そういう配慮を色々なところでして欲しい。それをお願いしたい、それだけ。

重岡

　その通り。歪曲、矮小化、コンプライアンスを守れと市長に言えばいい、行政のトップとして。それだけ。

南部

　あまり細かいことで責任取れなどと私はいいたくない。そうではなく、そういう問題を起こしてはいけないよと、そう思うでしょうが、だったら、そうならんようにして欲しいし、反対派の意見はまだまだいろいろあるから、井原さんや私に当てたら、もう少し建設的な意見を出していたよ。そこは、ぜひ考えて下さい。

（北朝鮮問題）

井原

　この問題は、追及ではなくて、もっとやることがあるのではないかという観点。

　例えば、この間ミサイルが発射されたが、あの時市役所は何かやっているのですか。

廣田

　いや、特にやっていません

井原

　国では、安全保障会議が召集され、情報収集が行われ、北海道ではミサイルが飛んでいったので何らかの会議などが行われたのではないか。そういう対応はしてないのですね

廣田

　していません。

井原

　例えば、アメリカが実際の武力行使に踏み切ったような場合には、岩国市としてどういう体制を取るの。

廣田

　特に、とりません。

井原

　ミサイルが飛んでくるようになったらどうするの

廣田

　それは、国防の一環として、イージス艦などで対応する

井原

　そんな事を聞いているのではなく、岩国市はどうするの

廣田

　国の対策会議からの指令で、やるべきことをやる。

井原

　日本が狙われて何発か打たれたような状態になっても、岩国市として、ただちに対策本部を立ち上げて情報収集したり、避難方法を考えたり、そういう対策も何もしないわけですか。

廣田

　それは、具体的にどういうタイミングですか

井原

　タイミングはいろいろあると思うが、例えば、アメリカが攻撃を始めたような段階、それが初期の段階だと思う。いつ打たれるかわからない段階で、岩国市はただ何もしないのですか

廣田

　具体的にどういうことですか。対策本部を岩国市で立ち上げてということですか

井原

　災害と一緒だと思うのですが、例えば、対策本部を立ち上げて情報収集をし、事前の避難所を開設したり、徐々に対策が始まっていくことになる。

廣田

　北朝鮮のミサイル関係で、そこまで具体的に岩国市という行政が何かをするということはありません

井原

　基地があることにより北朝鮮から攻撃される危険性は、感じていないのですか

廣田

　それは、個人的の話ですか、それとも行政としての仕組みとしてという意味ですか

井原

　もちろん、後者です

廣田

　それは、まだ、特別にとりたてて扱うということはありません

南部

　艦載機の移駐を容認して時々刻々と飛行機が増えて行くことになり、岩国が極東最大の航空機基地になった。市長は、住民の安全安心を担保する責任があるが、何かあなたに、市長から指示があるの。

廣田

　その関係では、今はまだ指示がありません。

南部

　全然ないの。容認の過程でも、何もないの。

高田

　北朝鮮のミサイルと容認との関係について、何か指示があったということはありません

南部

　だけど、容認を決断するときは当然危険性が増すだろうと一般的常識的には考えるはず

高田

　そこは、危険性が増すかどうかは一概には言えないと、先日申し上げた

南部

　何で。理屈にならない。

高田

　艦載機の移駐を容認しなくても基地はあるわけですね、艦載機が来なければ狙われないとか、来れば狙われるとか、基地の機能が強化されたから狙われるということは、一概には言えない。

廣田

　一般的な意味での話だと思うが、行政の役人が、公的に危険が高まりますとか高まりませんとかは、言えないと思う。

井原

　言えないというか、言いたくないのでしょうね。

廣田

　一般論として、変わらないという人も、危険性が高まるという人もいろいろな意見がある

南部

　要するに、何も考えていないということだ

井原

　先ほど、危機管理監は、北朝鮮問題は自分の範疇には入っていない、指示も受けていないと言っていた

廣田

　指示は受けていないが、ただ、国策として、Jアラートが鳴れば、市の防災無線を使って、また、市報などにチラシをはさみ市民に周知するなど、いろいろやっている。

津田

　それだけで、市民の生命、安全を守れるのですか。

廣田

　それは、防衛省がやるという役割分担になっている。防衛省が、日本海にイージス艦をおいて打ち落とすところから始まっている仕事の分担です。

小中

　トップダウンで仕事をやるというだけで、ボトム、下から、危機管理課の職務として、基地が存在しており今回それが拡大増強されるという状況で、住民の安全を確保すると言う立場から、私たち自治会としても、防災の担当者は訓練などいろいろやっているが、市としての指導などもきちんとして欲しい。ただ、政府から言われたチラシを配ったり、聞こえるか聞こえないかわからない拡声器から流すだけでは、ただやったというだけでは、住民はついてこない。

廣田

　Jアラートから流れてくる音声はどういうものか、岩国市自体がそれを市内一斉に流したときにどうなるか、行政のことも含めて、市民にも聞いていただいてみようということでやったもので、アリバイづくりではない。また、携帯の緊急メールにも同時に流すということも今検討している。確実に知らせるための対策づくりを今やってるところ。

小中

　今回の結果、どの程度市民に伝わったかということは、把握していますか。実際には、ほとんど聞こえていない。

廣田

　その音が、街中では特にビルなどに反射して、届きにくいという認識は持っています。その解消策についても、今検討しています。

南部

　国から入ってくる情報のルートは決まっているの

廣田

　県を通じて、衛星通信のファックスなどで来る。

南部

　県が一度受けたものを再送してくるのですね

廣田

　ミサイルが発射された後の、どこそこに落ちたとか、どれくらい飛んだとかいう情報は、県を通じてくる。

南部

　それは、テレビなどの情報より早いの、遅いの

廣田

　同じくらいになる場合もある

南部

　早くはないの。早くなかったら、住民に説明しても仕方がないのでは

廣田

　それは、住民にはニュースなどで流れている。

南部

　それでは、そういう情報は、テレビでとりなさいということか。

廣田

　そういう意味ではありません。質問が交錯した。

　ミサイルがとんだ瞬間の情報は、Jアラートでくるので、防災行政無線や携帯の緊急メールでながします。

南部

　即時に流れるのか

廣田

　タイムラグはありますが、即時に流します

津田

　私は、基地周辺に住んでいますが、Jアラートがなっても避難できる環境がない。避難する場所もないし、車が通れる道も二箇所しかない。そういうところで、岩国市はどうやって住民を守るのか。ただ、情報を流すだけでは意味がない

廣田

　ミサイルの発射に関しては、必ず住民を守るということは誰もできないと思っている。正直に言って。もし、方法があったら逆に教えてほしい。その前提で、ミサイルが10分以内に飛んでくるという中で、我々がどうしたら被害を最小限にくいとめることができるかということを今考えている。どこに着弾するかもわからないという前提で考えているが、どこかに落ちた瞬間からそれ以上に被害が最小限に収まるように、警察、消防と協議をしている。それが今、限界かなと思っている。正直、今市ができることをやろうと考えている。私も基地の近くに住んでいるので、言われることはよくわかるが。

津田

　過去に、岩国駅の橋上化の話が出たときに、避難道路を作って欲しいと要望した。逃げ道が無いので、そちらの方が優先ではないかと言ったが、できなかった。今は遥かに高齢化しているので、徒歩で逃げることはできない。ミサイルも津波も同じ。

廣田

　ミサイルは別として、津波は、言われていることが当たっている。東側の地区は逃げ道が限られている。南海トラフが揺れて津波が来るというときの避難の仕方は、今うまく考えられていないと思っているので、これから検討していく必要がある。

　ただ、ミサイルは、どこに落ちるかわからないので、動くことがいいのか、判断しにくい。そこは、限界があると正直思っている。

津田

　少なくとも、基地周辺は危険なわけでしょう、確率的に。

廣田

　ミサイルの精度が高ければ、そういう考え方もできるし、そうであれば、できれば誤差は７メートルであって欲しいのですが逆に。

井原

　でも、今、警察などと着弾した場合に被害を少なくするための協議をしていると言ったではないか。最初言ったことと違うが、要するに、対策を検討しているのですね。

廣田

　そうです。しかし、そうしたことは、表に向かっていうことではない、消防が火事を消しに行くという話と変わらないので、

井原

　予測は難しいかもしれないが、でも、何もしないで落ちたときの対応だけ考えるのではなく、やはり、基地の周辺はより危険であると考えることは普通ではないか、だから、そういう地域も想定して、着弾したときに少しでも被害が少なくなるよう、避難場所や避難ルートを確保しておくとか、連絡体制を作っておくとか、難しいけど、ミサイルの事も考えて、万が一の事態に備えて被害が少しでも少なくなるように、できるだけのことはやらなければならない。それをみなさんにも、知らせておく必要があるのでは。

廣田

　それは、やっています。ただ、ミサイルはどこに落ちるかわからないので、予め避難所やルートを決めておくことはできない。落ちたときに、早く警戒区域を設定して警察や消防が対応する・・・

井原

　いや、違うのでは。

廣田

　そこは、考え方の違いです。

津田

　基地の補助金を、避難道路の建設などに使うべきではないか。そういうことをぜひ考えて欲しい。

広中

　知り合いの息子さんが、岩国に帰りたいという話があった。子育て支援が充実しているので、最初乗り気だったが、北朝鮮のミサイルが飛んで来るので危ないから嫌だと奥さんが言ったという。今日の新聞にも載っていたが、４発ミサイルを打った中の１発は、地図の中で岩国基地がターゲットになっていた。そういうことが市民に伝われば、いくら子育て支援に力を入れても、子供を持った親にしてみれば、危ない地域ではないかと、その効果は半減する。国の指示待ちではなく、岩国市独自に市民の安全安心のために取り組んでいるという姿勢を早く打ち出して行かないと、せっかく帰ってこようという人達が、福島と一緒で、返って来れないので・・・

廣田

　お気持ちはわかるが、ただ、できないことをできるとは言えないので、ミサイルが飛んできたときに命を絶対に守るとは私には言えないので、それに対する対策は、どうしても事後の方に重きを置くことになる。

広中

　でも、岩国市独自の安全安心対策を見せないと・・・

廣田

　その出し方について、何かヒントをいただければ、できることはやりたい。でも、今自分で考える限りでは、難しいかなと思っている。

小中

　基地が存在する全国のまちで、対応策や国への要望など、協議する会議などはないのか。

廣田

　ないです。

重岡

　ハワイ州では対策を取っているので、勉強して欲しい。ミサイル発射時の問題、それから着弾時、そして着弾後の対応、概ね３つに分かれるが、今市として検討しているのは、どの部分に対して考えているのか。発射時は、Jアラートで情報を提供するが、着弾時はどこに落ちるかわからないので、何とも防衛のしようがない。だから、事後対応で、着弾後の対応を今検討しているということか。

廣田

　着弾時の初動ですね。実際に被害が出始めて、国の対策本部が立ち上がって、県の対策本部を通じて指示が来始めて、自衛隊が入ってくることになるのですが、それは時間がかかるので、その間は、市の消防と警察で被害を抑えるなり、避難誘導をするなり、救助活動をするなり、そこをしっかり詰めていこうと。

重岡

　それは、地域防災計画にいれるということ。

廣田

　いや、地域防災計画でも国民保護計画でも、そこまで具体的なことは決めていないので、今回は、もう少しシリアスな話なので、突っ込んで考えて行きましょうと、

重岡

　それは、いつまでに、お尻を切っているのか。

廣田

　お尻は切っていないが、

重岡

　お尻を切って、早く示さないと、市民の安全安心につながらない。いつごろまでに検討するの

廣田

　なるべく早くとしか、今は言えない。

重岡

　なるべくではいけない、今日言えないのであれば、また後日・・・

　それと、発射時はJアラートで知らせるということだが、その後の市民に対する情報提供はどうするの

廣田

　防災メールで・・

重岡

　例えば、防災行政無線が使えなくなる、メールも混んで使えなくなる場合もある。東日本大震災のときも情報がなく不安が広がって行った。そのときに、FM放送が有効な手段であったので、ラジオについても考えておく必要がある。

廣田

　今は、ラジオまでは考えていないが、どのメディアが壊れるかは、災害によって分からないので、複数化して、いろいろな情報が流れるようにしていくことを検討している。

重岡

テレビは停電になれば使えないから、ラジオしかない。

廣田

　インターネットやアイキャンのケーブルなどもあるので・・・

重岡

　発射時、着弾時、その後と整理して対応する必要があるが、まだ、整理できていない。お尻も切っていないので、早くしてもらいたい。

　回答の中で、「シェルターの設置は、全市民対象の確保は困難」としているが、全市民対象という言葉はどういう意味か。「今後については、情勢の動向により対応を考える」と面白い表現をしているので、説明して欲しい。保護者にしてみれば、子供だけは守って欲しいという気持ちが強い。だから、小中学校にシェルターを作ったらどうか、ロッククライミングなどで日頃から使えるものを。

廣田

　全市民が入るシェルターは無理ということを念のために書いた。

　絶対に作らないのかと言われると、これから、北朝鮮の情勢によって、今激しく動いているが、それが、冷戦のように情勢がある程度固まって来たら、年次的に作って行くということを・・・

重岡

　考えているということか

廣田

　いや、考えていない。考えていないけど、北朝鮮情勢によっては、そういうことも考えていかなければならないかなと・・・

重岡

　極東最大級の基地になり新たな脅威も出てきたのだから、総合計画などにシェルターを入れ込むことにより、市民が見て安心する。子供が小学校や保育園などでせめて元気でいて欲しいと思うのが親心。だから、計画の中に入れ込むことも大事。

小中

　市として、５年や１０年の長期計画は持っているのか。企業は、長期計画を持っていて、毎年見直しをしていく。そうしないと、発展はない。出たとこ勝負で言われるままにやっていては、だめ。シェルターなどについても、将来的な展望を持ってやっているのか。

南部

　シェルターは、確かに市内にない。あるとすれば、愛宕山のトンネル、あれが、唯一シェルターになるのでは。私は平田に住んでいるのであそこは使えると思っている。でも、ああいうところを使うとなると、事前に交通止めなどシミュレーションしておかないとだめ。そういうことを考えた事ある。

廣田

　ありません。でも、入れる人数が限られているのではないか。

南部

　でも、実際問題として、近所の人はあそこを使うだろう。

廣田

　それは、市として、あそこをシェルターに使うから入って下さいとは言えないと思う。

南部

　どういう理由で

廣田

　市がそこに逃げて下さいと言ったら、１４万人いるのを、お前何考えているのだと逆に言われるのではないか。

南部

　だけど、１４万人の人が入るようなシェルターは持っていないのだから、仕方がないのでは

廣田

　そういう考え方もありますが、それは、十人十色ですから。ミサイルが飛んで来るから何とかしようという気持ちはわかりますが。

　何も考えていないと言われたくないから、言えるところ、ギリギリのところまで出しているのですから。

井原

　いつそういう事態になるかわからないわけだから、そうするとシェルターなどは間に合わないから、既存の施設で避難できるところがあれば考えておいたほうがいいのでは。

廣田

　それが、１４万人入れないのでは・・・

　一部だけ作って、市がみなさん入って下さいとは言えないのでは。それは、無責任な話ではないか。

井原

　そう言ったって、災害の避難場所だってそうではないか、全部入れるわけではないのでは。

廣田

　それを、元市長が言ってはいけないですよ。避難所として市が指定しているのだから、それは全部入れますという前提で言わなければ仕方がないのですよ。ミサイルの場合に、ここにみんな入れますと真面目にいえますか、本当に。それは、ふざけているという話ですよ。

井原

　そんなことはない。

廣田

　災害の場合には、極端に言うと、家にいたほうが安全な場合もあるし・・・

井原

　だって、堅固な建物に隠れろと言っているではないか。

　それと、時限をあまりに限定的に考えているのではないか。ミサイルが発射されて着弾したときの避難をどうするか、少しでも災害を少なくするためにはどうするかを考えているのだと思うが、でも、アメリカ軍の武力行使が始まって、緊急事態になって、ミサイルがいつ飛んでくるかわからない状態が、場合によっては、何週間、何ヶ月間続くかもしれない、そうすると、いつミサイルが飛んで来るかもしれないという危険性が続くことになる、そうしたときに、市として何も対策をしないでいいのだろうか。

廣田

　それは、そうなったときに・・・

井原

　そうなったときにそういう話をするのは、遅いのでは。だから、市としても、きちんと考えておかなければ行けないし、いつも国の指示を待っているだけでは、国民保護計画でも市として独自に考えなければいけない部分があるのでは。大きなところは国から指示が来るのだろうが、細かいところは、現地の実情に合わせて市が考える必要があるのでは。

例えば、一つの例だが、台風が近づいて来たら、学校を休校にするではないか。仮に緊張状態になったときに、学校をそのままやっていていいのかという議論が出てこない？

廣田

　そうなったときに、休校しようと判断すればいいのでは。台風のときもそうですよ、来てから判断する。

井原

　そういうことを予め考えてあるからできる。そのときになって、休校すべきか否か、どの範囲をすべきかなどと考えていたら、手遅れになる。

　それと、そういう状態になったときに、住民の気持ちとして、危険だから一時仕事もやめて周辺部に避難しようとか、疎開しなければいけないのではと、いろいろ考える人も出てくると思う。そのときに、市は、自主的にやることだと任せておけばいいのか、

廣田

　正直、言われていることが、あまりに、無限に広すぎて、想定するには少し無理があるのではないかと思う。

井原

　かなり広い範囲だし、ミサイル防衛は本当に難しいことだから、なかなか対策が難しいのはわかるが、でも、そういう危険性が出てきたら何をすべきかということをもう少し考えて欲しい。

廣田

　もう少し、具体的に言われたほうがいい。もし、落ちたときに、それが毒ガスだったらどう対応するのか、それを予め考えておくべきだとか言われる方が、多分わかりやすいと思う。

小中

　予防対策をしっかりやるべき。

廣田

　何度も言うが、ミサイルに関しては、予防対策は限界があると思う。

重岡

　危機管理の対策を作るときに、第三者機関や諮問機関を持っているか。

廣田

　持っていません。

　地域防災計画とか災害はありますが、国民保護でもそれをやれば、まあ、あると言えばあるが、実質ないと思う。

重岡

　今日の部長のいうことは、想像力に乏しいし、泣きも入れている。ミサイル問題については、第三者機関を早急に立ち上げて、対策を考えておくべき。着弾後の対応の検討についても、国、県などの指導を受けてやっているのかわからないが、やりとりを聞いていると、どうも不安に感じる。だから、諮問機関か第三者機関を早急に立ち上げて、早く対策を示す必要がある。その考えはあるのか。

廣田

　ありません。

重岡

　今後の対応についても、国、県、市の三者で考えているの。

廣田

　市独自です。

重岡

　それは、問題。着弾するということになれば、国も県も市も、共同で考える必要がある。市だけで考えられる話ではない。

廣田

　一応、警察も入っているので、県といえば県になる。

重岡

　危機管理監としては、お粗末。対策がいつまで経っても出てこない。早く、第三者機関を召集して、着弾後の対応を考えるべきだということを申し入れておく。

南部

　さっき、ショックを受けたのは、市長から何ら指示がないということ。指示がないということは、何も考えていないということ。市長として、本当に市民の安全安心を考えるなら、防衛省にきちんと守ってくれと要望するとか、市長としてやるべきことはいくらもあると思う。何もやっていないでしょう。

廣田

　細かいことは、いろいろあると思う。市民にチラシを配ったりとか、Jアラートの仕組みの話とかを私も相談に言っていますから・・・

　質問されている意味での指示は、多分ないと思うが。

井原

　基本的に基地があることによる危険性、艦載機の移駐によりさらに危険性が高まって、危機管理として何かやらなければという意識は全然ないようですから

重岡

　市長からは何もない、こうして追及される、スタッフもいない、諮問機関もない、私はどうすればいいのかと困っているのが現状。

井原

　この問題は、我々不安だから、北朝鮮の問題を危機管理監としてきちんととらえて、大変むずかしい問題ではあるが、できることを具体的に検討して、市民にもわかるように示して欲しい。外部の専門家の意見も聞いて、ここにあるような対策を考えるのであれば、期限も切って、進めて欲しいということを申し入れておく。

小中

　地下に避難する場合に、公の施設も含めて、どこにどういうものがあるか、政府のチラシにも地下避難が書いてあるが、ただチラシを配ればいいというものではない、市民も右往左往するだけ。

廣田

　言葉を返すようですが、市が市役所に地下があるからどうぞと言ったら、逆に、お前は馬鹿かと言われる。

小中

　どこに、どんなものがあるかぐらいは、少なくとも、知らせる必要があるのでは・・・

井原

　ということは、あのチラシを配ったことも、馬鹿みたいなことだったということになる。

重岡

　ただ、ミサイル対応について、シェルター以外は、ここに逃げろとは言えない。逃げた所に着弾したら終わりだから。

小中

　それは、地域性の問題で、落ちたときにどう対応するかは、当然ある。

重岡

　だから、コンクリート製だからといって、そこを示すことは危険。

　しかし、国のチラシやJアラートなど子供だましのようなこともけしからんこと。

　だけど、ミサイルが飛んで来るという市民の不安が高まっているのだから、早急に、第三者機関を立ち上げて、お尻を切って対策を作り、市民に示す必要がある。

井原

　対策を考えてもらうのは危機管理監の方で、我々乏しい知識の中でどうこう言っても難しい面もあるので。でも、不安が高まっているので、安心とはいかなくても、少しでも被害が少なくなるように、行政として、もっと具体的に幅広く、期限も切って考えて、市民にそれを伝えて欲しい。その過程においては、国や県、外部の専門家の意見も是非聞いて欲しいということをお願いしておく。